

2014年 アデレード大学看護学部学術交換留学レポート

2014年8月16日から9月6日までの3週間、看護学部の1年次生(3名)、2年次生(3名)、4年次生(4名)の計10名がオーストラリアのアデレード大学(オーストラリアで3番目に古く、歴史ある公立大学)へ学術交換留学に出発しました。



研修先：The University of Adelaide
School of Nursing

[アデレード国際空港にてホストファミリーとご対面]

アデレード国際空港に到着すると、現地ホームステイ先のそれぞれのホストファミリーがお迎えに来てくれました。

いよいよ留学のスタートです。

アデレード大学表敬訪問



今回の学術交換留学プログラムは第1回目ということもあり、本プログラムの立ち上げに関わってくださったアデレード大学の関係者を表敬訪問しました。

歴史ある建物の美しい会議室で行われ、アデレード大学の副学長、学部長、学科長、研究科長等とお会いしました。本学からは国際交流委員長辻野教授をはじめとして、同委員鈴木教授、兵庫医科大学病院の山田明美看護部長(副院長)が出席し、このプロジェクトを契機に、さらなる次世代の交流促進に向けて取り組んでいくことを約束しました。

■オーストラリアの医療事情と看護の特徴〔講義〕

オーストラリアはとても広いため、地方で起きた事故などはヘリコプターが出動することが頻繁にあったり、夏場はユーカリが自然発火するので重篤な火傷の事故も多いといった内容です。アボリジニの健康問題についても、独特の生活習慣が健康障害を誘引する等、興味深い内容ばかりで、学生も熱心に聞き入っていました。



〔国際看護学担当のフランク先生による講義〕



〔看護学部建物正面玄関にて〕

■看護技術の演習〔説明〕

アデレード大学看護学部では、医学部にある演習室を共有して使用しています。コンピューターやビデオ撮影を駆使した教示方法が展開され、演習途中でも自己の言動を振り返りながら課題を抽出し、改善点を議論する方法が実践されています。



〔演習室にて実習〕

■現地学生との合同演習〔説明〕

いよいよ、現地の学生と合同演習です。現地の学生は1年次生ですが、社会人や他の学部を卒業してから入学している学生も多く、日本の学生よりも平均年齢が若干高い感じです。また多民族国家でもあるため、意志の疎通を図るコミュニケーション能力も長けているようです。一方、参加したばかりの本学学生はドキドキで最初は緊張気味でした。この日は現地の学生もまったく初めての点滴セットの準備演習でした。



DVD やデモンストレーションにより点滴セットの準備に関する説明があり、その後で滴下数の計算演習の例題があり、みんな必死で計算をしています。この計算が全問正解しないと、実際の演習に移れないからです。

オーストラリアでは、アデレード等の中心部では輸液セットの滴下数を管理する機器が導入されていますが、郡部では人による管理が主流です。そのため、学生はどこで働いてもいいように、点滴の滴下数の算出方法と管理方法を学びます。



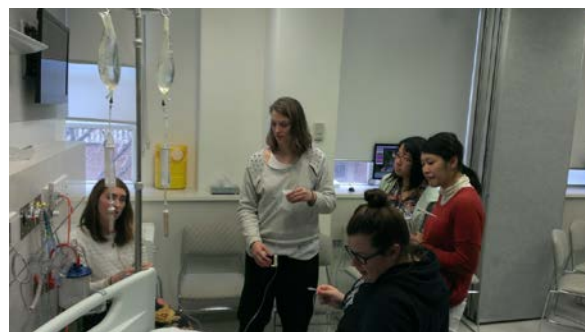
〔現地学生に混じって計算に悪戦苦闘？〕



〔スキルスラボ見学〕



〔点滴の準備をする4年次生〕



〔慣れない1年次生には現地学生がサポート〕

■アデレード大学病院にて見学研修

アデレード大学病院は、アデレード大学看護学部に隣接した場所にあります。日本から持参したユニフォームに着替えて病院で見学研修をしました。



〔見学研修スタート！〕

アデレード大学病院は 3 次医療を担うため、入院患者は全員救急医療を受ける人ばかりです。そのため患者さんは手術をして症状が安定すると、3 日前後で退院させて自宅療養か二次医療の病院へ転院させます。入院患者さんの多くは交通事故や若者の危険行為による事故（超高速運転によるジェットスキーの衝突やスキューバダイビングによる事故・潜水病、サメの襲来、ユーカリの自然発火による火事の被害）などが特徴的です。

もう一つの特徴は、脳神経外科病棟において、ほとんど意識のない人の看護を専門チームスタッフにより、症状の悪化を防ぎ、改善に向けた看護をしていることです。そういった患者さんの中には、数か月から数年の入院期間になる患者さんもいるようです。



各病棟に設置された倉庫には、赤色は採血、輸血など循環系の医療器材、青色は採尿、尿道カテーテルなど泌尿器科系の医療機材、緑は消化器系、それ以外は黄色の整理棚に収納されています。色分けによる備品管理も学生にとっては珍しく、質問をしながら熱心に聞いていました。



〔医療器具倉庫にて教育担当師長から説明を受けています〕

日本でも徐々に導入されている高酸素濃度治療室を見せていただきました。高酸素濃度治療は、潜水病だけでなく、下肢に壊死をおこすような重篤な糖尿病患者や癌の治療で放射線治療をした人を対象に提供される最先端の治療方法です。通常空気中の酸素は 23%程度ですが、100%に近い高濃度酸素を吸うことで、放射線によって衰弱した細胞や萎縮した血管などが、酸素刺激により再生させるものです。

潜水艦のような治療室に水を入れて潜らせて治療するのではなく、シェルターのような部屋の中に入り、そこで椅子に座った状態で潜水夫のような防具を頭部全体にかぶり、酸素を吸わせて治療ができることを学び、学生にとっては驚きの連続でした。



〔高酸素濃度治療室の説明〕

■ブッシュダンスパーティ

「ブッシュ・ダンス」という名の海外留学生交流会がありました。

ホストファミリーが持ち寄った料理をみんなでいただき、その後はダンスが始まりました。フォークダンスのようなもので、以前は郊外にある本物のブッシュの中で、現地の学生も交えてダンスが行われていたようです。今は安全面や衛生面を考慮して、市民ホールを使って行われています。



ずっと英語の生活で緊張していた学生も、久しぶりの日本語ばかりの会話に終始和んだ雰囲気でした。

■Problem Based Learning〔問題解決型授業〕

3年生（アデレード大学看護学部最終学年）のPBLのクラスに参加。内容は大変高度でディスカッションも素晴らしいものでした。本学の4年次生は、自分たちの実習と看護過程の展開を振り返り、もっと学ばなければならない事を痛感していました。



■研修最後のプレゼンテーション

アデレード大学看護学部の先生方を前に、アデレードで体験したこと・学んだこと・感じたことを率直に発表しました。発表後のディスカッションでは、アデレードの学生が日本へ留学するにあたってどのようなことを準備すべきかが話し合われ、出席して下さった先生方からは「well done!」とのお言葉をいただきました。



■PCE (Professional & Continuing Education)主催の Graduation dinner

全員修了書を手にニコリ。ホストファミリーも出席され、忘れがたい貴重な経験をさせていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。



3週間前とは比べ物にならないくらい多くの出会いと経験と英語の実力を身につけ、帰国の途につきました。

プログラムに参加して日本以外の看護の現場や学びに触れ、大きく視野が開けた学生も多く、この経験を糧として、今後の学習や現場での活躍に対して大いに期待しています。